

第8回（平成24年度第6回）札幌文化芸術円卓会議の発言要旨

25.2.7 札幌文化芸術円卓会議事務局

はじめに、出席各委員から自己紹介を行った。

伊藤副委員長、野田委員が所用のため欠席したが、それぞれメッセージがあり、伏島委員長が、そのメッセージを読み上げた。

次に、伏島委員長から市長へ、「平成23/24年度 札幌文化芸術円卓会議からのメッセージ」を手渡した。

【伏島委員長】

この私達のメッセージは、平成21/22年度第1期の円卓会議からのメッセージと、（仮称）アートセンター検討委員会からの提言の議論を受けて、まずは整理した。

市民と行政とアーティストとをどうつないでいくかが非常に重要。それを、前任者たちは、芸術の産業化を意識しながら、この関係を築いていったらどうかと提案した。

それを私達は一步踏み込んで、芸術は、札幌の地場産業の一つとして頑張ってもらおう、それが都市の経済を活性化していこうと位置付けた。そうすると、具体的にどうしていくか、中心的な場が必要になるだろう。それが、前任者が議論してきたアートセンター、われわれはこれをアーツセンターという。というのは、アートセンターをそのまま直訳すると、美術センターになってしまうので、われわれは、複数形ということでアーツセンターと言う。そのアーツセンターを拠りどころとして、戦略的にものを進めて行こうということから出発した。

そこで私達は、一番の土台となるのは人間的な関係だと思った。ハードよりも、まず人間的な関係を築いていくことが大事だろう。例えば、協働する場として、そこには具体的な、いわばお世話役が必要だということだ。

多彩な人が集まる自由な創造拠点としてのアーツセンターには、芸術監督、それといろいろなことをお世話するアートソムリエ、コーディネーターがいる。そういった、コーディネーターを育てて行く場でもある。

それと、ボランティアは、無償で働く人というイメージを抱く人が多いのだが、言葉の本来の意味は自発的に活動すること。そういう人たちが集まる場でもある。そして、全体をきちんと経営する人もいる。そのような具体的な人々がアーツセンターでどのようなお世話をしていくか、というよう

にイメージしていった。

どんな働きをしていくか。まず、当たり前のことだが、札幌らしい芸術を創り出していく。それと冒頭から触れているように、プロデューサーやマネージャー等、実務の担い手を育てていく。それと実際に芸術を担う人々、あるいはそれをおくる人、あるいはそれを受け止める人、そういった人をお世話するサポート、それときちんとした研究者も必要だ。札幌には文化芸術に強い中高年の人もたくさんいるので、彼らがそこで活躍する。

それと、誰を支えて行くか、どのようなアーティストを支えて行くかといったときに、やはり基本は若い人だろう、まず小さい子ども、市長も本当によくおやりになっていると思うのだが、音楽、美術に関して、札幌の子どもたちは、けっこうすごいことになっている。それをもっと幅広く力強く育てて行く。そういうことも含めた、若い人を支えるしくみをつくりたい。それと、芸術文化だけで閉じてはいけないので、きちんとまちづくりの核として働くべきだ。たのしみな街づくりを担っていく。商店街、企業を活性化していく、いわば起爆剤としてのアーツセンターだ。

人間集団としてのアーツセンターが必要なのだが、やはりハードも必要になってくる。ひとつは、いろいろな企業メセナも含めた、公的助成も含めた、情報ステーション。ここに来れば、良い情報を必ず獲得できるという機能。

それと、演劇、バレエ、ダンスなど、いろいろな分野の人が、そこで実験的なところみをする。研究しながら、みんなで育て合いながら、札幌らしいアートをつくっていくという意味で、アカデミーシアターと名付けたのだが、そういったものが必要である。200人から300人くらいの小さいもので十分だと考えている。

それと、建物の中の広場がアートにも使えるような、賢い建物の作り方をしていく、そして、その中は、これから行われる札幌のアートのショーケースの役割も持つ。

さきほども触れたように、札幌にはベテラン陣がいっぱいいる。彼ら彼女らは、出番を待っている。彼らにしっかりと登場してもらって、シンクタンク機能を担ってもらおう。もちろんそこでは、若い人も育てて行く。

それと、みんなで話したのだが、楽しくなければだめだ。美味しいものもあるとよい。こういったものがあると、人々も集まりやすい。敷居が低くなるので。サロン、ショップ、ライブラリー、札幌の企業の力を含めてということ考えた。

具体的にはどうしていくかということ考えたときに、私達は、札幌市に全部丸投げでお願いするのではなくて、我々も汗をかいていこうということで、民間の企業にも参画していただく。アートセンターの構想を具体的に練

っていく段階から、アートに関連する企業、建築設計から、営業、販売促進の人たちもからんでいく。例えば東京都の写真美術館は、資生堂の福原さんが館長になって、ものすごく劇的に変わった。企業の力があると施設も良くなるので、そういった意味で、札幌、北海道らしい民間企業の参画をお願いしたいと思う。参画した人々にもメリットがある。参画した企業が、アート関係でこんなことをしたいということがあったら、それに積極的に、アドバイスをする、広告宣伝は、アートの力で相当良いものができる。そんなこともアーツセンターでお世話していく。

そして、札幌は観光や食の街でもあるから、そういったこともアーティストたちが積極的にお手伝いしていく。いわば、地場産業としてのアート産業を担っていく一つの具体的な形、多分他都市にはない、どこの政令指定都市でもここまでは踏み込んではいない、そういったものを、われわれは提案したいと思う。

最後になるが、2年間はあっという間だった。各区をどうするかということまでは議論に入れなかった。これを宿題にして、あの方々に議論していただきたい。札幌の都心にできるアーツセンターと各区をきちんと結んでいく、おじいちゃんもおばあちゃんも、各区にいてもいろいろな情報を得られるというような街に、札幌全体を育てて行きたい。

それと、宿題としては、今大阪市でも東京都でも議論が始まっているが、アーツカウンシル、いってみれば、文化行政を市役所の中に抱え込むのではなくて、少し表に出して、より客観的に分析して判断して助成も行っていく、開かれた文化行政、そういった形をどう設計するかという宿題が残っている。それと、才能ある若いアーティストはたくさんいるのだが、どうしても東京に出ざるを得ないということもあるので、彼女、彼らたちが札幌で食べていけるような街にしていく、演劇の世界では少し後援も始まっているが、それを演劇に限らずいろいろな分野で、みんなでしっかり優秀な意欲のある若者を育てて行くということを具体的に考える必要がある。それと街づくりからめてどう支援していくのか、こういった具体的なことは、宿題として少し残っている。これからも議論していきたいと考えている。

それでは、各委員から一言ずつ御発言いただきたい。

【浅野委員】

写真の分野から、今回議論に関わらせていただいた。私は、東川町の「写真甲子園」の企画の仕事もしているので、そのようなことから思ったのだが、今回、札幌で国際芸術祭も進んでいるので、そういったものとも連携しながら、アートの街として、これからさまざまに活躍していくことが地域活

性化に重要だと思ふし、そういった部分で、前に市長にもご覧いただいたような、昔の写真と子どもたちに関わっていくというような、ああいった形でアートにどんどん触れあっていくことが大切だと思ふ。

【荒川委員】

私は、伝統芸能の分野から携わらせていただいたのだが、札幌市のほうで、伝統芸能の存在感が薄いように感じている。

札幌の民謡関係者が、カーネギーホールで明日公演を行う。そのように、札幌には優秀な人材がたくさんいるのだが、地元札幌の方では、なかなか発表の機会がなく、東京や東北の方で発表する機会ばかりが多くなっている。そういうことも、アーツセンターができるころには、おそらく民謡連盟も100周年を迎えているので、そのときに何かしらの連携が取ればよいなと思っている。

【井出委員】

オペラの研修団体をしていて、8年前から札幌市芸術文化財団の方で、「さっぽろオペラ祭」をさせていただいている。その中で、北海道二期会、札幌室内歌劇場、いろいろな方々と、オペラを市民の方たちに広めようという試みと同時に、今、小学校へおとどけコンサート、アウトリーチをさせていただいている。これがとても好評をいただいて、いまはボランティアでさせていただいているが、私たちが小学校へ行って演奏することによって、その子どもたちがホールへ来てオペラを鑑賞するという、良い動きになっている。

子どもたちに、アートというのか、そういう機会をたくさん作っていただくことが未来へつながるのかなと、とても感じている。

【漆委員】

わたくしは、おとどけアートという事業を、札幌市でやらせていただいている。

小学校へいろいろな芸術家の方をお連れして、数週間、毎日転校生という形で学校に通って、日々の創作活動を行っている。

そういった立場のかかわりと、今国際芸術祭で、マネジメントのお手伝いをさせていただいている。

いずれにしても、今、写真であるとか伝統芸能であるとか、オペラであるとか、私は現代美術の分野だが、あとは演劇とか、札幌にはいろいろあるのだが、ひとつはそれを横断して行って、何か子どもに対する活動であるとか、もっと広い意味での市民に対して、アウトリーチ的なことをやっていくとい

うことになったときに、横断していくしくみとつなげていくしくみというのが、なかなか既存の機関、プロジェクトでは足りないのかなということを感じている。そういう意味で、今回のアートセンターの中で、コーディネーションに関する人材の育成であるとか、横断的しくみというところを僕も提案させてもらったのだが、今まで職業としてとか、役割として余り重要視されていなかった部分なので、そういったところを、自分もそういった立場で動いている人間のひとりとして、ぜひ、そういった層を増やしていくことによって、それを受け取る側と発信する側の層も同時に増えて行くのかなというイメージがあった。そういったことを積極的に検討していただけたらうれしい。

【本家委員】

私自身には小学生の子どもがいるのだが、小学生たちが、もっと芸術に興味を持って、自分たちの街が格好良いとか誇れるような札幌市になってほしいと思う。

【田中委員】

私は、1年半前に、3.11の影響で、千葉県幕張メッセから引っ越してきた。芸術文化に対して非常に興味があって、月の半分くらい劇場に通っている。オペラ、ミュージカル、演劇を通して、札幌の街の個性は何なのだろうというところから入ったのだが、非常に一年半前と比べて、レベル的には底上げしているのではないかと感じている。

演劇とかオペラとか、協会を通しての横のつながりがあるところに限っては、それが顕著に出ているのではないかと思っている。

このことをもっと市民の方に伝えたいし、教えたいし、私もそのことを通して喜びを感じたいし、もっともっと情報を発信できるような形になればよい。その意味で、アーツセンターを大いに期待しているし、アートソムリエになりたいなど、私自身思っている。

【斎藤委員】

1年間議論に参加させていただいて、自分の演劇の村社会のことしか考えたことがなかったので、とても勉強になった。

札幌市の予算とか文化庁の予算とか使わせていただきながら、やらせていただいているのだが、この10年間、札幌座チーフディレクターとしてやってきたことは、ほとんど専門家教育だ。僕は今48歳だが、それより10歳若い、35、6歳の、僕のような演出家を4、5人つくるのが、とりあえず

のミッションだったのだが、ようやくこの春終わった。僕 1 人が食べていたのが、4、5人食べはじめてきた。

そうすると、今後、この街でやりたいなと思っていることは、僕が今までやってきたようなことではなくて、みなさんおっしゃっていたのだが、演劇が今までほとんど出来ていなかった、初等教育へのアプローチをやってみたい。実験的にいくつかの小学校ですでに始めているのだが、そういうようなことを、例えば漆さんがやっているようなことから学びたいし、僕らもそのようなノウハウをどんどん蓄積していかなければならない。演劇は、そのようなジャンルが遅れている。それを、例えばアーツセンターみたいなところに僕らがどんどん入っていくことで、他ジャンルの方とも交流を持って、積極的に演劇人も、もっとそっちの世界に入っていくつつ、初等教育、20年後のこの街のアーティストをどうつくっていくかということに、これからの余生を使おうかと最近思っている。

【市長】

本当にありがとうございました。それぞれの観点で御議論いただいた。多分、アーツセンターと言うのは、こういう議論が常に出来るというのだろうか。いろいろな分野の方々のそれぞれの日常の活動を寄せ合って、札幌の芸術文化状況というか、そういったものを語り合って、それぞれの持ち場へ持ち帰って活動し、それを発表する場所をきちんと用意する。舞台芸術であれば舞台を用意する。もっとフラットな、街中が、芸術のパフォーマンスができる場所として展開できるようなロケーションをつくっていくとか。学校も非常に大切な場であると思う。

芸術の目標、行政が芸術に期待すること、それにはいろいろな側面があるが、ひとつには、この街に住む人たちが、自分のさまざまな仕事や興味をもつこと、いろいろな趣味、それらを深めたり、あるいはこれまで当たり前だと思ってやってきたことを、何か刺激を受けたり、あるいは共感を覚えたり、皆様がたのさまざまな芸術表現に接することによって、違う角度からものを考えることができる。そういう深みのある展開をしていくことができるようになるということだ。

われわれは、よく活性化というと経済のことを言うが、そうではなくて、生き方を活性化していく。それが自発的な動機を生み、そしてものごとを展開していく中で、新たな経済活動になったり、生き方になったりということだ。ダイナミックに展開する火付け役にみんななってほしいと思う。それは、大人も子供もそうだ。そういう意味で、いろいろな場面で質の高い芸術が生まれ、発信できる場所をつくっていくということだと思う。

もうひとつは、広めて行く、つなげて行くということだ。横のつながりもそうだが、縦のつながりもそうだ。特に子どもたちに対して、この街で生きることの喜び、自然にそういう発想ができる大人になってもらうということだ。子どものコミュニケーション能力を醸成するということが当然なると思う。それを楽しくできる、そういうチャンスを提供することは、行政が願うというか、目的としていることだ。

多くの皆様から頂戴した税金を活用させていただいて、今、この街全体に活力をもたらすものになっていくことが大事だと思う。

このアーツセンターも、そういう意味で、常に検証しながら問題点を洗い出して、相互批判、相互補完をして、新しいものをつくっていく原動力になれるような場を、機能として置くことになると思う。物理的にどのようなものを作ることになるが、その思想なり理念というものが、この建造物にどうやって具体化していくかということが残って来ると思う。

理念とか思想とか、それをそのまま固定するのではなく、点検して常に議論できる、そういう場をつくっていく、それが大事だと思う。

そのようなセンター機能、みんなが集い、議論できる場、そういう機関をつくっていく。そのような場を建物の中に落とし込む、制度的に保障していく、そういうことにつなげて行く。

それと、アートセンターを北1西1の複合施設につくるというときに、大ホールのことばかり目立つが、大ホールは、ある意味では完成型の芸術を鑑賞する場だ。それはとても大事なことだが、市民が主役になって何をするか、バックヤードだったり、あるいは前庭だったり、そういう場所にどういうものを作っていくかということだ。小さな発表する場所だとか、あるいは展示をする場所だとか、街中をそういうものにつなげて行く。

いろいろな連携というのだろうか。いつも芸術活動を発信し、そこで実現するのと、そのことを各区でつなげていく。区民センターのステージがどのような形で運営されるのかということも含めて、いろいろなステージがあり、いろいろな活動ができるだろうから。

あるいは、相談機能。アーカイブだって、昔こんなことをやって、それをどうやっていかそうかというようなことを、引き出しから出せる。映像も記録もいろいろな音声も、書物もあれば、経験した人をいつも呼んでこれるとか、そういうことがやすやすとできる。

そういうことができるようになれば良いなと、みなさんのお話を聞いて、私も想いを同じくするものだ。

【伏島委員長】

ありがとうございます。私達と同じ考えを共有されている。すごく、感動した。ぜひ、いっしょにやりましょう。われわれも汗をかくので。

【市長】

これまでも、札幌の子どもたちに目を向けて、Kitara という素晴らしいホールをもっているので、小学 6 年生で、札幌交響樂團をしっかりと聞いてもらおうということで、「Kitara ファーストコンサート」という、超一級のホールで生演奏を聴くチャンスをつくって 10 年続いている。もう 15 万人くらいの子供たちが参加している。Kitara で聞いたことがない大人がいなくなるように、札幌で小学生時代をおくった人は、必ず一回はまともな音を聞いたことがあるというようにしたい。

ミュージカルも、「こころの劇場」を、劇団四季にやっていただいている。これも全員に見せている。

それともうひとつは、美術の観点で、ハローミュージアム、これは 5 年生全員がどこかの美術館へ行って、中心的には芸術の森だが、佐藤忠良記念子どもアトリエでの彫刻をするワークショップ、自分で土をいじり、造形していくという体験を、一度はみんなする。そんな経験を積んでもらうことによって、一度それを体験して楽しい思いをもっていただければ、必ずこれからの長い人生、豊かな気持ちを持って生きて行くことができる。

当面忙しくて何もできなくても、いつか思い出してくれる、あるいは誰かが何かをやっているときに、「あっ、やったことある、おもしろい」ということを感じることはできる。そういう気持ちをもった子どもたちが、札幌に出てくることになると思っている。

ちょっと和文化についてはバックアップが足りないかもしれない。でも肝心なときには、みんなの前で発表できる。

写真は、北 1 条地下歩行空間に、歴史写真館がある。演劇は、演劇シーズンが出来た。まだまだバックアップが足りないのだが、100 人の演劇人が本当に生活できる、食える、そして本当に質を高めて行くことができる街、素晴らしい皆様がたの熱意で、それを目指す第一歩が少し出てきたかなと思う。

あらゆる意味で、舞台芸術も展示会場も、チカホも、500m美術館も、いつも動いているぞという状況をつくる。ほんとうに良いものを、有限なスペースを、最高に効率よく、そして機動的なダイナミックな活動を展開できるように、みなさんの精神をしっかりと活かせるようなものにしていくよう、これからも努力していきたいと思う。

今後とも、またいろいろな角度から、御批判、御注文をいただけるように、

窓口をしっかりと開いていきたいと思うので、よろしくお願いします。

【伏島委員長・各委員】

ありがとうございました。